

## 中学生の生活不安と攻撃性に関する研究

藤井 義久\*

(2013年3月5日受理)

Yoshihisa FUJII

### A Study on Life Anxiety and Aggression among Junior High School Students

#### I. 問題

青年前期に当たる中学生時代は、Newman & Newman (1975) も述べているように、第2次性徴の出現に代表される急激な心身の変化に戸惑いや不安を感じる事が多い時期である。それに伴い、様々な問題行動の発生が増大する時期でもある。それらの問題行動は、大きく「不登校」のような「不安」が根底にある「非社会的問題行動」と、「暴力行為」のような「攻撃性」が根底にある「反社会的問題行動」に分けられる。

文部科学省(2012)の調査によると、平成23年度、「非社会的問題行動」の1つである「不登校」の中学生は94836人で、「不登校」の小学生が22622人であったことからすると、中学生の不登校問題は極めて深刻な状況であると言える。なお、中学校における不登校人数の学年別内訳で見ると、1年生が21895名、2年生が33716名、3年生が39225名と学年が上がるにつれて増加傾向にある。一方、平成23年度、「反社会的問題行動」の1つである「暴力行為」は中学校において39282件発生し、小学校の7175件、高校の9442件に比べて格段に多い状況である。このことから、中学生の暴力問題は、前述の不登校問題と同様に極めて深刻な状況であると言える。なお、中学校における暴力行為の発生件数の学年別内訳で見

みると、1年生が10977件、2年生が14820件、3年生が14047件と2、3年生における発生件数が多い傾向にある。

このように中学校において問題行動の発生件数が大幅に増加することからもわかるように、小学校から中学校への移行期は、大きな環境の変化に伴う学校不適応を生み出しやすい時期であると考えられる。特に、Ellias, Gara & Ubriaco (1985) や宮ノ腰・橋(2002)の研究でも明らかのように、中学校における新入学時のストレスが学校不適応を生み出す大きな要因となっていることは広く知られているところである。

さて、中学校において特に深刻な状況である「不登校」に代表される「非社会的問題行動」を引き起こす原因と考えられている「不安」と「暴力行為」に代表される「反社会的問題行動」を引き起こす原因と考えられている「攻撃性」は、全く正反対の情動のように思われる。しかし、岡田(2000)の学校ストレス研究において、中学生の攻撃行動は、学業や友人関係といった学校ストレスによって直接引き起こされるのではなく、情動的ストレス反応が高まって初めて生起する二次的反応であることから、情動的ストレス反応の1つと考えられている「不安」と「攻撃性」との間には関連があるのではないかと述べている。また、攻撃行動を生み出す原動力と考えられている

\* 岩手大学教育学部教授

情動的ストレス反応は、「抑うつ・不安」や「怒り・不機嫌」などあるが、その中でも特に「不安」が攻撃行動と密接に関連していることが今までの研究（松尾, 1984）から明らかになってきている。ただ、「不安」と言っても、対人不安やテスト不安など様々な不安が存在する。そのうち、どの不安が特に人間の攻撃性と密接に関連しているか現在のところわかっていない。

そこで本研究においては、前述の通り、最も問題行動が発生しやすい青年前期に当たる中学生を対象にして、学校生活のみならず、家庭や社会生活を含めて広く日常生活において日々感じている不安、いわゆる「生活不安」と「攻撃性」との関連性について検討することにした。そのためにはまず、中学生が、家庭、学校、社会において日々感じている不安を多面的に測定するだけでなく、学校不適応傾向の強い生徒の発見にも役立つ「中学生生活不安尺度」を作成することが必要であると考えた。

現在までよく使われている不安尺度としては、顕現性不安を測定するために開発された Manifest Anxiety Scale (Taylor, 1953), 略して MAS や、通常の特徴不安だけでなく現在の不安状態である状態不安の測定も可能にした State-Trait Anxiety Inventory (Spielberger, Goursch & Lushene, 1970), 略して STAI などが挙げられる。しかし、いずれの不安検査も、一般成人を対象に一般的な不安水準を測定する尺度で、具体的日常生活場面に焦点を当てた尺度ではない。従って、これらの不安尺度では、どういった日常生活場面において特に不安が強まるのかといったことはわからない。不登校の子供たちなどは、家庭にいる時は不安をあまり感じないけれども、学校に関係した出来事に遭遇したり学校のことを思い出したりすると急に不安が強まるといったことはよく見られる現象である。従って、何らかの問題を抱えている子供たちに対して個別支援計画を立てていく場合、一般的な不安水準ではなく、個々の日常生活場面ごとの不安水準を測定する必要がある。そうした日常生活場面に応じて変化する不安水準を測定できる唯

一の尺度として、藤井 (1998) が開発した「大学生生活不安尺度」が存在している。しかし、この尺度には、開発されてからすでに10年以上経過しており当時の社会状況と異なってきていること、あくまで大学生を対象とした尺度であるので学齢期の児童生徒には適用できないなどの問題点が存在する。

なお、藤井 (2013) は、現在、大学不適応傾向の強い学生の発見に役立つ「大学生生活不安尺度」(College Life Anxiety Scale), 略して CLAS を全国の大学で実施できるように改訂作業を行っているところであり、2013年10月に新たな形で CLAS の手計算版とコンピュータ採点版がマニュアルと併せて金子書房より発刊される予定である。この CLAS が発刊されると、全国の大学における不適応学生の発見及びそういった学生に対する手厚い支援を行うことができるようになるばかりでなく、各大学において深刻な問題となっている留年や退学者数を減らすことにもつながると期待されている。ただ、CLAS は、現在のところ、中学生を対象とした尺度の標準化を行っていないことや、中学校生活においては相応しくない項目が含まれている等の理由から、中学生に対して実施することは難しい。そこで、本研究においては、新たに現代の中学生の実態を反映した「中学生生活不安尺度」を作成し、その信頼性、妥当性を検討することにした。そして、その尺度を用いて、中学生が日常生活において感じている不安の現状及び発達的变化について明らかにすることが、本研究の第1の目的である。

次に、中学生の「攻撃性」の問題について取り上げる。「攻撃性」は、いじめや生徒間の暴力、教師への暴力、非行との関係が深いと言われている（濱口, 2002）。その「攻撃性」の定義であるが、研究者によって必ずしも一致しないのが現状である。例えば、秦 (1998) は、「攻撃性」を「他の生活体に対して有害な刺激を与えること」と定義している。しかし、松木 (1996) が述べているように、攻撃性が向けられる方向は必ずしも他者や外界の対象ばかりでなく、「自傷行為」や「自殺」

などのように自分自身に向けられる場合もある。渡辺（2000）は、攻撃性は自身へ向けられることによって、様々な形態を取りながらも自分という存在を確認する手段となることを示唆している。従って、本研究においては、外に向けられる攻撃性だけでなく、「自殺」に代表される自分自身に向けられる攻撃性も扱うことにする。そして、攻撃性の方向に注目しながら、中学生における攻撃性の現状及び発達的变化について検討するとともに、中学生が日々感じている生活不安と攻撃性との関連性について分析することが、本研究の第2の目的である。

中学校において特に深刻な問題となっている「非社会的問題行動」と「反社会的問題行動」は現れる現象から見ると全く異なった問題行動のように思われがちであるが、方向性に違いはあるにしろどちらの問題行動も共通に「攻撃性」の高い問題行動であると言える。すなわち、「非社会的問題行動」は自分を責めたり傷つけたりするといった「自分に対する攻撃性が強い問題行動」であると捉えることができるのに対して、「反社会的問題行動」は教師や友人などの他者に対する攻撃性が強い問題行動であると捉えることができる。従って、日常生活において感じる何らかの不安によって生じる「攻撃性」が内に向かうか外に向かうかによって、同じ不安であっても「非社会的問題行動」として現れる場合もあれば、「反社会的問題行動」として現れる場合もあると考えられる。

そこで、本研究においては、「生活不安」と「攻撃性」という2つの情動を手がかりに、中学校における様々な問題行動を生み出すメカニズムについて検討することにした。

## Ⅱ. 方法

### 対象者

東北地方の公立学校2校に通う中学生（1年～3年）、計526名（男子270名、女子258名）を対象とした。なお、学年別内訳は、1年生217名（男子112名、女子105名）、2年生168名（男子85名、

女子83名）、3年生141名（男子73名、女子68名）である。

### 調査手続

各学校の都合の良い時間に、原則として担任によって以下の内容から成る調査用紙を対象者に一斉に配布して、回答を求め、回答終了後、直ちに回収する方式で、調査が実施された。なお、調査に当たっては、倫理的配慮の観点から、「自分の回答が他人に漏れる心配のないこと」、「学校の成績に全く関係のないこと」、「答えたくない質問に対しては答えなくても良いこと」など、口頭及び文書によって対象者に伝えた。

### 質問紙

#### (1) 中学生の生活不安に関する質問紙

中学生の生活不安に関する質問項目の収集に当たって、公立中学校に通う中学生（1年～3年）計102名（男子52名、女子50名）を対象として、生活不安に関する自由記述調査を実施した。具体的には、「あなたは、中学校生活を過ごしていて、普段、どのようなことに不安を感じていますか」と教示して、自由に記述してもらう方式で調査が実施された。そして、収集された項目について、内容的妥当性の観点から本調査で採用するかどうか、大学教員1名と現職の中学教員2名の計3名によって検討し、最終的に内容的妥当性があると判断された32項目を本調査で用いる項目とすることに決定した。なお、回答は、それぞれの項目について、「自分と全く違う（0点）」、「どちらかと言うと自分と違う（1点）」、「どちらとも言えない（2点）」、「どちらかと言うと自分に当てはまる（3点）」、「自分にぴったり当てはまる（4点）」という5つの選択肢の中から1つを選ぶ5件法とすることにした。

#### (2) 日本版児童用抑うつ自己評価尺度 (Depression Self-Rating Scale for Children ; DSRS)

Birleson (1981) が開発した尺度をもとに村田ら (1996) が開発した日本版児童用抑うつ自己評価尺度18項目を用いた。本尺度の本来の適用範囲は7歳から13歳となっているが、Firth & Chaplin (1987), Ivarsson & Gillberg (1997) の研究に見

られるように、思春期から青年期への適用も十分可能であることが明らかにされている。回答は、「いつもそうだ」、「ときどきそうだ」、「そんなことはない」の3件法で尋ね、抑うつが高いと思われる回答から順に、2点から0点を与え、単純加算方式により、対象者のうつ得点を算出する。なお、本尺度において、うつ傾向が強いと判断されるカットオフスコアは16点である。

### (3) 希死念慮に関する質問

「あなたは、死にたいと思ったことがありますか」と質問して、「全くない」、「時々ある」、「よくある」という3つの選択肢から1つを選ぶ3件法で、希死念慮傾向を測定した。

### (4) 簡略版怒り尺度

藤井(2009)が開発した簡略版怒り尺度(20項目)を用いた。この尺度は、「友達に対する怒り」(5項目)、「親に対する怒り」(5項目)、「自分に対する怒り」(5項目)、「先生に対する怒り」(5項目)という4つの下位尺度から構成されている。回答は、「それぞれの場面に遭遇した時、腹が立ちますか」という質問に対して、「全く腹が立たない(0点)」、「あまり腹が立たない(1点)」、「どちらとも言えない(2点)」、「かなり腹が立つ(3点)」、「とても腹が立つ(4点)」という5つの選択肢から1つを選ぶ5件法である。なお、怒り得点は、単純加算方式により算出する。

### (5) 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ)

安藤ら(1999)が開発した24項目を用いた。なお、本尺度は、「短気」(6項目)、「敵意」(6項目)、「身体的攻撃」(6項目)、「言語的攻撃」(6項目)という4つの下位尺度から成っている。なお、回答は、「自分に全く当てはまらない」、「自分にあまり当てはまらない」、「どちらとも言えない」、「自分にかなり当てはまる」、「自分に非常によく当てはまる」という5つの選択肢から1つを選ぶ5件法で尋ね、攻撃性が高いと思われる回答から順に、0点から4点を与え、単純加算方式により、攻撃性得点を算出する。

### 分析手続

データ分析に当たっては、岩手大学情報処理セ

ンター所有の統計解析アプリケーションである SAS を用いた。

## Ⅲ. 結果

### 1. 中学生生活不安尺度の作成

まず、中学生の生活不安に関する質問紙(32項目)の全項目の平均値及び標準偏差を求めたところ、1.0未満という極端に項目得点の低い項目は見られなかったため、32項目すべてを以下の分析対象とすることにした。なお、平均値が相対的に高かった生活不安項目として、「テストで悪い点を取ってしまうのではないかと心配です」( $M=2.71$ ,  $SD=1.24$ )、「受験に失敗したらどうしようと不安で仕方ありません」( $M=2.48$ ,  $SD=1.36$ )、「将来、自分の行きたい所に就職できるかどうか不安です」( $M=2.48$ ,  $SD=1.29$ )といった主として評価に関する項目が挙げられた。

次に、中学生の生活不安に関する32項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。このとき共通性の初期解は1として、以下の主因子解でも同様の初期値を設置した。そして、固有値の減少傾向とプロマックス回転後の解釈可能性から3因子を抽出した。男女別に同様の因子分析を行った結果、因子構造に男女差は見られなかったことから、以下の分析はすべて男女を合わせたもので行った。ただ、負荷量が低い項目、および2つの因子に高い負荷を示す、いわゆる二重負荷の項目が8項目あったので、それらの項目を削除し、同様の因子分析を行った結果、最終的に、Table 1の通り、3つの因子が抽出された。

第1因子は、「自分が犯罪に巻き込まれたどうしようと不安です」、「自分が事故にあったり、病気をしたらどうしようと心配です」など、今後起こるであろう危機状況に対する予期不安に関する項目に高い因子負荷が認められたので、これら8項目をまとめて「危機状況不安因子」と命名した。第2因子は、「学校の成績のことを考えるとゆううつです」、「テストを受ける時、悪い点を取ってしまうのではないかと心配です」など、評価に対

する不安に関する項目に高い因子負荷が見られるので、これら9項目をまとめて「評価不安因子」と命名した。第3因子は、「自分のクラスに入ると、何か息苦しい気分になります」、「できることなら学校を変わりたいけど仕方ありません」など、学校不適応状態を示す項目に高い因子負荷が見られるので、これら7項目をまとめて「学校不適応因子」と命名した。

以上の3つの下位尺度、計24項目からなる尺度を今後「中学生生活不安尺度」と呼ぶことにした。なお、下位尺度間の相関係数は、Table 2の通り、.43から.53で中程度の相関が確認された。以下、それぞれの下位尺度に含まれる項目得点（0点－4点）を単純に加算したものを生活不安得点とする。なお、そのような手続きを経て算出された生活不安得点（全体）の平均値は39.95点（ $SD=16.98$ ）

Table 1 中学生生活不安尺度の因子分析結果（PROMAX 回転）

項目内容	<i>M(SD)</i>	F1	F2	F3	<i>h</i> <sup>2</sup>
18.自分が犯罪に巻き込まれたらどうしようと不安です	1.42(1.30)	<b>.75</b>	-.05	.09	.59
19.家族に何かあったらどうしようと思う	2.31(1.33)	<b>.74</b>	-.05	.04	.52
20.困難な状況に直面した時、どうしようと思う	2.06(1.29)	<b>.71</b>	.15	-.08	.58
21.日本の将来のことを思うと不安です	1.79(1.41)	<b>.67</b>	-.00	-.03	.44
22.困難を乗り越えられるか不安です	1.81(1.29)	<b>.66</b>	.17	.06	.59
23.また大きな地震があったらどうしようと思う	1.41(1.34)	<b>.63</b>	.03	.02	.42
32.放射能の影響が心配です	1.09(1.22)	<b>.56</b>	-.15	.15	.32
26.世の中の動きに対して不安を感じる	1.26(1.23)	<b>.50</b>	-.12	.28	.36
4.学校の成績のことを考えると、ゆううつです	2.13(1.31)	-.08	<b>.80</b>	-.02	.58
1.テストで悪い点を取ってしまうのではないかと心配です	2.71(1.24)	-.01	<b>.78</b>	-.02	.53
10.学校の成績のことが気になって仕方ありません	1.89(1.39)	.03	<b>.76</b>	.04	.61
3.テスト中、わからない問題に出会った時、頭が真っ白になります	1.63(1.28)	-.18	<b>.67</b>	.20	.48
9.テスト中、時間が残り少なくなると焦ってしまいます	1.88(1.39)	-.06	<b>.65</b>	.12	.45
29.受験に失敗したらどうしようと不安で仕方ありません	2.48(1.36)	.27	<b>.60</b>	-.08	.53
16.将来、自分の行きたい所に就職できるか不安です	2.48(1.29)	.29	<b>.54</b>	-.10	.47
15.テスト中、緊張して自分の力を発揮できません	1.32(1.17)	.06	<b>.50</b>	.36	.54
11.学校で、人が自分をどう思っているか気になります	2.13(1.38)	.14	<b>.43</b>	.22	.40
30.自分のクラスに入ると、何か息苦しい気分になります	1.04(1.17)	.00	-.06	<b>.80</b>	.61
13.できることなら学校を変わりたいけど仕方ありません	1.08(1.00)	.02	-.14	<b>.79</b>	.58
2.この学校にいると何か不安な気持ちになります	1.13(1.16)	-.06	.14	<b>.76</b>	.64
25.相談相手がなくて心配です	1.04(0.91)	.16	-.12	<b>.70</b>	.53
5.できれば学校に行きたくないと思うことがあります	1.61(1.42)	-.22	.22	<b>.60</b>	.43
7.学校で誰かにいじめられるのではないかと不安です	1.12(1.16)	.16	.20	<b>.55</b>	.53
24.学校の先生と話をする時、緊張します	1.13(1.23)	.25	.25	<b>.42</b>	.50

Table 2 中学生生活不安尺度における下位尺度間の相関係数

	危機状況不安	評価不安	学校不適応
危機状況不安	1.00	.53***	.43***
評価不安		1.00	.50***
学校不適応			1.00

注. \*\*\* $p<.001$ 

で、各下位尺度ごとの平均値は、「危機状況不安」が13.15点 ( $SD=7.11$ ), 「評価不安」が18.65点 ( $SD=8.10$ ), 「学校不適応」が8.15点 ( $SD=5.60$ ) であった。

## 2. 中学生生活不安尺度の信頼性

「中学生生活不安尺度」によって求められる生活不安得点 (全体) が29点以下の者134名 (25.48%) を全体得点下位群, 53点以上の者133名 (25.29%) を全体得点上位群として G - P 分析を行った。その結果, 「中学生生活不安尺度」24項目すべてにおいて, 全体得点上位群の方が全体得点下位群に比べて1%水準で有意に項目得点の高いことが明らかになった。

さらに, 各下位尺度ごとに Cronbach の  $\alpha$  係数を求めたところ, 「危機状況不安」が .89, 「評価不安」が .80, 「学校不適応」が .89, 全体でも .82 という値を得た。

以上の結果を総合すると, 本研究において開発した「中学生生活不安尺度」には一定の信頼性が備

わっていると言える。

## 3. 中学生生活不安尺度の妥当性

中学生生活不安尺度の妥当性について, 不安頻度とうつ得点という2つの観点から検討することにした。

まず, 不安頻度によって調査対象者を3群に分けた。具体的には, 「あなたは, 最近, 日常生活において, 不安でたまらなくなったことがありますか」という質問に対して, 「全くない」と回答した生徒229名をL群, 「時々ある」と回答した243名をM群, 「よくある」と回答した45名をH群として, 不安頻度水準によって生活不安得点に有意な差が見られるかどうか, 1要因分散分析によって検討した。Table 3に, 不安頻度水準ごとの生活不安得点の平均値, 標準偏差及び1要因分散分析結果を示した。その結果, Table 3の通り, 「中学生生活不安尺度」のすべての下位尺度得点及び全体得点において, 不安頻度水準間に有意差 (危機状況不安:  $F(2,523) = 22.69, p < .001$ ; 評価不

Table 3 不安頻度水準ごとの生活不安得点の平均値, 標準偏差及び1要因分散分析結果

	不安頻度水準			F
	L群 (N=229)	M群 (N=243)	H群 (N=45)	
危機状況不安	10.97(6.88)	14.30(6.66)	17.13(7.55)	22.69***(L<M・H, M<H)
評価不安	15.66(7.68)	20.29(7.18)	26.38(7.24)	49.00***(L<M・H, M<H)
学校不適応	5.17(4.74)	8.56(5.26)	11.80(6.98)	55.31***(L<M・H, M<H)
全体	31.80(15.57)	43.15(14.98)	55.31(15.71)	59.72***(L・M<H, L<M)

注. ( ) 内の値は標準偏差。

\*\*\* $p<.001$

安: $F(2,523) = 49.00, p < .001$ ; 学校不適応: $F(2,523) = 55.31, p < .001$ ; 全体: $F(2,523) = 59.72, p < .001$ ) が認められた。そこで、さらに Tukey の多重比較を行ったところ、「中生活不安尺度」のすべての下位尺度及び全体得点において、不安でたまらなくなつた経験の多い生徒ほど、生活不安得点が5%水準で有意に高い傾向が確認された。

次に、DSRSによって算出されたうつ得点によって調査対象者を3群に分けた。具体的には、うつ得点が0点から9点の生徒164名をL群、10点から15点の生徒203名をM群、16点以上の生徒157名をH群として、うつ水準によって生活不安得点に有意な差が見られるかどうか、一要因分散分析によって検討した。Table 4に、うつ水準別の生活不安得点の平均値、標準偏差及び1要因分析結果を示した。その結果、Table 4の通り、「中生活不安尺度」のすべての下位尺度及び全体得点において、うつ水準間に有意差(危機状況不安: $F(2,523) = 15.02, p < .001$ , 評価不安: $F(2,523) = 29.30, p < .001$ , 学校不適応: $F(2,523) = 97.20, p < .001$ , 全体: $F(2,523) = 54.86, p < .001$ ) が認められた。そこで、さらに Tukey の多重比較を行ったところ、「中生活不安尺度」のすべての下位尺度及び全体得点において、うつ水準H群の生徒の方が、L群、M群の生徒に比べて5%水準で有意に生活不安得点の高い傾向が確認された。また、L群、M群の関係で見ると、「中生活不安尺度」

のすべての下位尺度及び全体得点において、うつ水準M群の生徒の方がL群の生徒に比べて5%水準で有意に生活不安得点の高い傾向が確認された。これらの結果から、うつ傾向の強い生徒ほど、生活不安得点が高い傾向が確認された。

これらの傾向は、一般に考えられている傾向と一致していることから、「中生活不安尺度」の妥当性を支持する1つの結果であると捉えることができる。

#### 4. 生活不安の性差及び学年差の検討

「中生活不安尺度」によって算出される生活不安得点の性差及び学年差について検討するために、下位尺度ごとに、二要因分散分析(性×学年)を行った。Table 5に生活不安得点の男女別学年別平均値、標準偏差及び分散分析結果を示した。その結果、性差については、すべての下位尺度において有意差が認められなかった。一方、学年差については、「学校不適応」を除くすべての下位尺度及び全体得点において有意差(危機状況不安: $F(2,520) = 9.39, p < .001$ ; 評価不安: $F(2,520) = 10.26, p < .001$ , 全体: $F(2,520) = 7.45, p < .001$ ) が認められた。そこで、さらに発達的变化について確認するために Tukey の多重比較を行ったところ、危機状況不安、評価不安、生活不安(全体)とも、受験を控えた3年生の方が1,2年生に比べて有意に生活不安得点の高い傾向が確認された。

Table 4 うつ水準ごとの生活不安得点の平均値、標準偏差及び1要因分散分析結果

	うつ水準(DSRS)			F
	L群 (N=164)	M群 (N=203)	H群 (N=157)	
危機状況不安	11.97(7.38)	14.78(7.99)	16.67(7.86)	15.02*** (L・M<H,L<M)
評価不安	15.41(8.14)	18.95(7.14)	21.96(7.91)	29.30*** (L・M<H,L<M)
学校不適応	3.93(4.03)	7.85(4.98)	11.66(5.80)	97.20****(L・M<H,L<M)
全体	31.31(16.09)	41.58(15.38)	50.28(17.71)	54.86*** (L・M<H,L<M)

注. ( ) 内の値は標準偏差。

\*\*\* $p < .001$

Table 5 性別×学年ごとの生活不安の平均値, 標準偏差及び2要因分散分析結果

	1年生	2年生	3年生	F		
				性	学年	交互作用
危機状況不安	11.32(7.42)	12.44(6.87)	14.25(6.73)	n.s.	9.39***	n.s.
	12.36(7.39)	13.39(6.28)	16.00(6.84)			
評価不安	16.70(8.28)	18.14(7.86)	21.14(6.81)	n.s.	10.26***	n.s.
	17.97(9.61)	18.99(6.60)	21.28(7.46)			
学校不適応	7.25(5.47)	7.07(6.22)	7.36(4.51)	n.s.	n.s.	n.s.
	7.24(6.16)	8.37(5.74)	6.81(4.98)			
全体	35.27(17.89)	37.65(16.67)	42.74(13.63)	n.s.	7.45***	n.s.
	37.57(19.57)	40.75(14.76)	44.09(15.67)			

注. ( )内の値は標準偏差。

\*\*\* $p<.001$

Table 6 希死念慮傾向ごとの生活不安得点の平均値, 標準偏差及び1要因分散分析結果

	希死念慮傾向			F
	L群	M群	H群	
	(n=387)	(n=102)	(n=37)	
危機状況不安	12.56(6.90)	14.83(7.55)	13.19(7.42)	4.19* (L<M)
評価不安	17.63(7.74)	21.66(7.99)	22.57(9.12)	15.17***(L<M,H)
学校不適応	6.02(4.87)	10.79(5.73)	11.81(6.12)	49.74***(L<M,H)
全体	36.21(15.77)	47.28(17.35)	47.57(18.40)	24.00***(L<M,H)

注. ( )内の値は標準偏差。

\*\*\* $p<.001$

### 5. 希死念慮傾向と生活不安との関連性

本研究においては、内に向かう攻撃性として希死念慮傾向を取り上げた。希死念慮傾向は、「死にたいと思うことがありますか」という質問に対して、「そんなことはない」、「ときどきそうだ」、「いつもそうだ」で回答を求めることによって調べた。その結果、「そんなことはない」と回答した生徒387名をL群、「ときどきそうだ」と回答した生徒102名をM群、「いつもそうだ」と回答した生徒37名をH群として、希死念慮傾向によって生活不安得点に有意な差が見られるかどうか、

1要因分散分析によって検討した。Table 6に希死念慮傾向水準ごとの生活不安得点の平均値, 標準偏差及び1要因分散分析結果を示した。その結果、「中學生生活不安尺度」のすべての下位尺度及び全体得点において、希死念慮傾向間に有意差(危機状況不安: $F(2,523)=4.19, p<.05$ ; 評価不安: $F(2,523)=15.17, p<.001$ ; 学校不適応: $F(2,523)=24.00, p<.001$ , 全体: $F(2,523)=24.00, p<.001$ )が認められた。そこで、さらにTukeyの多重比較を行ったところ、希死念慮傾向のない群の生徒は、希死念慮傾向のある群の生徒と比較して有意に生

活不安得点の低いことが確認された。

**6. 攻撃性傾向と生活不安との関連性**

外へ向かう攻撃性の測定を目的としたBAQによって算出された攻撃性得点に基づいて、調査対象者を3群の攻撃性傾向に分けた。すなわち、攻撃性得点が34点以下の生徒171名をL群、35点から48点までの生徒191名をM群、49点以上の生徒164名をH群とし、外に向かう攻撃性傾向によって生活不安得点に有意な差が見られるかどうか、1要因分散分析によって検討した。その結果、Table 7の通り、「中生活不安尺度」のすべての下位尺度得点及び全体得点において、外に向かう攻撃性傾向間に有意差（危機状況不安： $F(2,523) = 5.15, p < .05$ ; 評価不安： $F(2,523) = 22.58, p < .001$ ; 学校不適応： $F(2,520) = 33.25, p < .001$ ; 全体： $F(2,523) = 25.48, p < .001$ ）が認められた。そこで、さらにTukeyの多重比較を行ったところ、外へ向かう攻撃性の高い群の生徒は、攻撃性の低い群の生徒と比較して有意に生活不安得点の高いことが確認された。

**7. 攻撃の方向性と生活不安との関連性**

攻撃性の方向は、大きく「内に向かう攻撃性」と「外に向かう攻撃性」に分かれる。そこで、まず「内に向かう攻撃性」と「生活不安」との関連性について、重回帰分析によって検討することに

した。「内に向かう攻撃性」は、単に自殺や自傷行為といった、直接的に自分自身を傷つける行為そのものだけでなく、自分を責める行為、例えば、「自分は何をやってもだめな人間である」といった抑うつ傾向の強い者において見られる特有の悲観的思考や、「自分自身に対して無性に腹が立つ」といった自分に対する怒り感情も含まれる。そこで、本分析においては「内に向かう攻撃性」を測る尺度として、うつ尺度であるDSRSと「簡略版怒り尺度」における下位尺度の1つである「自分に対する怒り」尺度を用いることにした。それらの尺度によって算出される「うつ得点」と「自分に対する怒り得点」を目的変数、「中生活不安尺度」の各下位尺度得点を説明変数として重回帰分析を行った。その結果、Table 8の通り、標準偏回帰係数（ $\beta$ ）の値から、特に、学校不適応傾向が強い生徒ほど、うつ得点の高い傾向が確認された。

次に、「外に向かう攻撃性」と「生活不安」との関連性について、同様に重回帰分析によって検討することにした。「外に向かう攻撃性」は、直接的に相手に向かって行う身体的攻撃や言語的攻撃といった行為そのものだけでなく、例えば、「腹が立って、相手に対して殴りたい衝動にかられている状態」といった、相手への攻撃行動を生み出

**Table 7 攻撃性傾向ごとの生活不安得点の平均値、標準偏差及び1要因分散分析結果**

	攻撃性傾向(BAQ)			F
	L群 (n=171)	M群 (n=191)	H群 (n=164)	
危機状況不安	11.63(7.14)	13.67(7.15)	13.80(6.83)	5.15* (L<M)
評価不安	15.54(7.92)	19.74(7.68)	20.95(7.78)	22.58***(L<M,H)
学校不適応	5.04(4.59)	7.37(5.07)	9.75(6.14)	33.25***(L<M,H) (M<H)
全体	32.21(16.36)	40.78(15.70)	44.50(16.72)	25.48***(L<M,H) (M<H)

注. ( )内の値は標準偏差。

\*\*\* $p < .001$

す原動力となる他者への怒り感情も含まれる。そこで、本分析においては、「外へ向かう攻撃性」を測る尺度として、一般的な外に向かう攻撃性傾向の測定を目的として開発されたBAQと、「簡略版怒り尺度」における下位尺度である「友達への怒り」尺度、「教師への怒り」尺度、「親への怒り」尺度を用いることにした。それらの尺度によって算出される「攻撃性得点」、「友達への怒り得点」、「教師への怒り得点」、「親への怒り得点」それぞれを目的変数、「中生活不安尺度」の各下位尺度得点を説明変数として重回帰分析を行った。その結果、Table 8の通り、標準偏回帰係数( $\beta$ )の値から、特に学校不適応傾向の強い生徒ほど攻撃性得点が高い傾向が確認された。また、怒りの方向性の観点から見てみると、同じく標準偏回帰係数( $\beta$ )の値から、学校不適応傾向の強い生徒ほどとりわけ教師に対して怒り感情を向けやすいことがわかった。

#### IV. 考察

本研究の目的は、「中生活不安尺度」を作成し、中学生が日常生活において感じている「生活不安」の現状について分析するとともに、「生活不安」と「攻撃性」との関連性について検討することであった。

まず、自由記述調査によって収集した「中学生の生活不安」に関する32項目について、主因子

法・プロマックス回転による因子分析を行った結果、中学生の生活不安の因子として、「危機状況不安」、「評価不安」、「学校不適応」という3つの因子が抽出された。特に「危機状況不安」因子は、藤井(1998)の「大学生生活不安尺度」にはない、新たに抽出された因子である。その因子を構成している項目について見てみると、「また大きな地震があったらどうしよう」とか「放射能の影響が心配です」といった、まさに東日本大震災後の危機的状況に関する不安項目が多数含まれていたことから、東日本大震災が中学生の生活不安水準を高める大きな要因となっていることが改めて浮き彫りになった。そして、抽出された3つの因子に基づき、二重負荷の見られる項目などを削除しながら同様の因子分析を繰り返し行った結果、最終的に3つの下位尺度、計24項目から成る「中生活不安尺度」が生まれた。

次に、その「中生活不安尺度」の信頼性、妥当性について検討した。信頼性については、各下位尺度ごとのCronbachの $\alpha$ 係数が.80から.89、全体でも.82という値を得たことから、本尺度には一定の信頼性が備わっているものと判断された。今後は、本尺度の信頼性についてさらに確認すべく、再検査信頼性や折半法信頼性の検討も詳細に行っていく必要があると考えられる。一方、妥当性については、「中生活不安尺度」によって測定される「生活不安得点」とDSRSによって測定される「うつ得点」との関連性について分析

Table 8 中学生の生活不安と攻撃性との関連性 (重回帰分析結果)

	内への攻撃性		外への攻撃性			
	うつ傾向 (DSRS)	自分への 怒り	攻撃性傾向 (BAQ)	友達への 怒り	親への 怒り	教師への 怒り
危機状況不安	-.04	.08	-.17	.05	-.00	.00
評価不安	.08	.10	.37***	.08	.09	.04
学校不適応	.53***	.14	.79***	.16	.11	.31***
R <sup>2</sup>	.32	.23	.16	.19	.17	.20

\*\*\* $p < .001$

することにより検討した。1 要因分散分析の結果、「中学生生活不安尺度」のすべての下位尺度において、うつ傾向間に有意差が認められた。すなわち、うつ得点が高い生徒ほど一般に生活不安得点が高いことが明らかになった。佐藤・嶋田(2006)や柿原・桶町(2012)の研究からも明らかなように、一般に抑うつ傾向と不安症状は密接に関連していると考えられていることから、本研究結果が一般的に考えられている傾向と一致したことは、「中学生生活不安尺度」の妥当性を支持する1つの結果であると言える。しかしながら、この結果だけで、「中学生生活不安尺度」には十分な妥当性が備わっていると断言することはできない。今後、本尺度の妥当性については、さらに多角的に検討していく必要があると考えられる。

次に、作成された「中学生生活不安尺度」を用いて、生活不安の性差及び学年差について2要因分散分析によって検討した。その結果、性差については、「中学生生活不安尺度」のすべての下位尺度得点、全体得点とも有意ではなかった。藤井(1998)の「大学生生活不安尺度」を初めとして、一般に女子の方が男子に比べて不安得点は有意に高い研究が多い中で、中学生を対象とした本研究においては有意な性差は見られなかった。なぜこのような結果になったのか、生活不安において有意な性差が見られないのは中学生特有の現象なのか、今後、小学生や高校生に対しても同様の調査を行うことによって検討していく必要がある。一方、生活不安の学年差については、「学校不適応」を除く、すべての下位尺度得点及び全体得点において有意差が認められた。そして、Tukeyの多重比較の結果から、学年が上がるにつれて有意に生活不安の高まる傾向が確認された。この結果から、中学生の場合、入学当初は、将来に対して希望と期待が強くのびのびと学校生活を過ごしているが、学年が上がるにつれて、学業や進路の問題に直面し、将来に対する不安、すなわち予期不安が次第に高まっていくものと考えられる。なお、「学校不適応」尺度のみ有意な学年差は認められなかったことにも注目しておく必要がある。このような

結果になった背景には、測定しようとしている不安のタイプの違いがあると考えられる。すなわち、「中学生生活不安尺度」の3つの下位尺度のうち、「危機状況不安尺度」や「評価不安尺度」においては、「自分が犯罪に巻き込まれたらどうしよう」や「テストで悪い点を取ってしまうのではないかと心配です」といったように、いずれも将来起こるであろう危機状況や失敗状況に対する予期不安を主として測定していると言える。一方、もう1つの下位尺度である「学校不適応」尺度においては、「自分のクラスに入ると、何か息苦しい気分になります」といったように、学校不安が主たる原因であると考えられる現在の学校不適応状態を測定していると言える。すなわち、「中学生生活不安尺度」の下位尺度のうち唯一有意な学年差が認められなかった「学校不適応」尺度は、不安そのものを測定しているというよりは、不安が原因して生じている現在の学校不適応状態を測定しており、他の2つの下位尺度とやや性格が異なる尺度であるため、有意な学年差は見られなかったものと考えられる。本研究結果から、予期不安は学年が上がるにつれて高まるのに対して、学校不安が原因して生じると考えられる学校不適応状態そのものについては学年による変化は見られないことがわかった。従って、どの学年においても一定数の学校不適応を起こしている生徒が存在していることが推定される。

次に、「内に向かう攻撃性」の指標として「希死念慮傾向」、「外に向かう攻撃性」の指標としてBAQによって算出される「攻撃性得点」を用いて、攻撃性傾向によって生活不安得点に有意な差が見られるかどうか、1 要因分散分析によって検討した。その結果、「中学生生活不安尺度」のすべての下位尺度及び全体得点において、「希死念慮傾向」、「攻撃性得点」とも有意差が認められた。すなわち、攻撃の方向に関係なく、一貫して攻撃性傾向の高い生徒ほど生活不安得点が高い傾向が見られた。この結果から、登校することに過度の不安を抱えている不登校の子供たちの中に、家庭内暴力を繰り返しているケースがよく見られるが、そ

うした暴力を初めとした攻撃行動をよく起こす子どもは、より生活不安が高い子どもであると考えることができる。従って、我が国においては現在深刻な問題となっている子どもの攻撃行動を減らすためには、その根幹にある不安の存在に目を向け、その子の攻撃行動を生み出す原因となっている不安について、アセスメントし、攻撃行動の原因となっている不安要因を可能な限り除去することが必要であると考えられる。

そこで、生活不安と攻撃性との関連性について、さらに重回帰分析によって検討した。具体的には、「内に向かう攻撃性」の指標として、DSRSによって算出される「うつ得点」、「簡略版怒り尺度」における下位尺度の1つである「自分への怒り」尺度の得点、「外に向かう攻撃性」の指標として、BAQによって算出される「攻撃性得点」、「簡略版怒り尺度」における下位尺度である「友達への怒り」、「親への怒り」、「教師への怒り」それぞれの尺度の得点を用いた。そして、それぞれの得点を目的変数、「中生活不安尺度」の各下位尺度得点を説明変数として重回帰分析を行った。その結果、標準偏回帰係数( $\beta$ )の値から、特に学校不適応傾向が強い生徒ほど、内に向かう攻撃性も、外に向かう攻撃性も高いことが明らかになった。この結果から、日常生活において感じている個々の不安というよりも、学校不適応状態そのものが中学生の攻撃行動を生み出す大きな要因になっていることが考えられる。さらに、怒りの方向性で見ると、重回帰分析の結果から、学校不適応状態に陥ると、特に教師に対して怒りに向けやすい傾向が見られた。この結果から、中学生の場合、学校不安が原因して生じる学校不適応傾向が強まると、とりわけ教師に対して攻撃行動を取りやすくなることが示唆される。文部科学省(2012)の調査において、平成23年度、中学生の対教師暴力件数は6627件で、小学校における対教師暴力発生件数1123件、高校における対教師暴力発生件数735件に比べて、中学校の対教師暴力発生件数は群を抜いて多いことが明らかになっている。このように深刻な状況である中学校における

対教師暴力は、「学校に行きたくない」といった学校不適応状態に陥った結果、生じることが明らかになった。ただ、そうした中学生の学校不適応傾向を減らすことによって、果たして本当に教師への攻撃行動の発生が減るかどうかについては、今後さらに詳細に検討していく必要があると言える。

今後は、さらに、調査対象を拡げて、小学校の児童に対して生活不安と攻撃行動に関する研究を実施し、生活不安や攻撃行動の発達の变化や両者の関係を中心に、中学校の結果とどう異なるか明らかにしていきたいと考えている。そして、最終的には、我が国においては深刻な問題となっている学校内外で生じる暴力行為や自殺といった攻撃行動を未然に防ぐためにどうすればよいか明らかにしていきたいと考えている。

## 付 記

本研究は、平成23-25年度学術振興会科学研究費(基盤研究C)(課題番号:23530909)「青少年の生活不安と攻撃行動に関する発達臨床心理学的研究」(研究代表者:藤井義久)の助成を受けて実施された。

## 引用文献

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・島田洋徳・宇都木成介・大芦治・坂井明子  
1999 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70(5), 384-392.
- Birleson, P. 1981 The validity of depressive disorder in childhood and the development of a self-rating scale: A research report. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 22, 73-88.
- Elias, M.J., Gala, M., & Ubriaco, M. 1985 Sources of stress and support in Children's transition to middle school: An empirical analysis. *Journal of Clinical Child Psychology*, 14, 112-118.

- Firth, M.A., Chaplin, L. 1997 Research note: The use of the Birlerson depression scale with a non-clinical sample of boys. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 28, 79-85.
- 藤井義久 1998 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 68 (6), 441-448.
- 藤井義久 2009 児童生徒のキレやすさ傾向に関する国際比較研究 学校メンタルヘルス, 12, 59-68.
- 藤井義久 2013 大学生生活不安尺度 (CLAS) マニュアル 金子書房 (2013年10月発刊予定)
- 秦 一士 1998 フラストレーション場面における敵意, 怒り, 言語反応の関係 日本教育心理学会総会発表論文集, 40, 151.
- 濱口佳和 2002 学校における問題・不適応行動と攻撃性 山崎勝之・島井哲志 (編) 攻撃性の行動科学: 発達・教育編 ナカニシヤ出版, Pp.135-151.
- 柿原未佳子・桶町美華 2012 児童の抑うつ症状と不安症状の関連についての検討 福山大学こころの健康相談室紀要, 6, 127-134.
- 宮ノ腰浩二・橘良治 2002 高校入学1か月後におけるストレスの様相 岐阜大学教育学部研究報告, 人文科学, 51 (1), 211-220.
- Newman, B.M. & Newman, P.R. 1975 *Development through life : Psychosocial approach*. Homewood, IL: Dorsey Press.
- 松木邦裕 1996 対象関係論を学ぶ クライン派精神分析入門 岩崎学術出版社
- 松尾祐作 1984 児童期・青年期における不安傾向 福岡教育大学紀要第34号第4分冊, 153-158.
- 文部科学省 2012 生徒指導上の諸問題の現状について (平成23年度)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/24/09/1325751.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/1325751.htm) (平成24年9月11日)
- 村田豊久・清水亜紀・森陽二郎・大島祥子 1996 学校における子どものうつ病 - Birlerson の小児期うつ病スケールからの検討 - 最新精神医学, 1, 35-40.
- 岡田佳子 2000 中学生の学校ストレスに関する研究 (2) - 構造方程式モデルによる二次的反応の生起に関する分析 - 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 258.
- 佐藤寛・嶋田洋徳 2006 児童の抑うつに対する認知行動療法の研究動向, 行動療法研究, 32, 31-43.
- Spielberger, C.D., Gorsuch, R., & Lushene, R. 1970 *Manual for the State-Trait Anxiety Inventory*. Consulting Psychologist Press, Palo Alto California.
- Taylor, J.A. 1953 A personality scale of manifest anxiety. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 285-290.
- 渡辺 旦 2000 抜毛症の心理臨床における「閉ざされた攻撃性」と「開かれた攻撃性」ある男児との遊戯療法から 心理臨床学研究, 18 (2), 139-150.